

わたしの戦争体験

福岡市東区 増田 光喜

私は大正14年3月の生まれ、今年70歳になります。徴兵検査は昭和19年でした。戦争が激しくなり徴兵検査も1年繰り下げて19歳となり、私がちょうど19歳で検査受験しました。同年7月検査、8月入隊通知書受領、9月入隊と慌ただしい年でした。その頃の現役入隊通知書にはどんな内容が書かれていたのか、一応書いておきます。

- 一、集合月日 昭和19年9月26日
- 二、集合場所 門司市東海岸
- 三、入隊部隊 中支派遣軍呂2147部隊
- 四、兵種 鉄道兵

他に持参品、入隊までの健康管理等でした。

呂2147部隊とは、当時、中国中央部に派遣された軍の第一線部隊で鉄道第12連隊のことでした。

私の生まれ、そして育った故郷は福岡市ですが、両親が大分県玖珠郡の出身でしたので、入隊は久大線北山田駅より出発しました。列車は門司方面に向かって進行している。一人座席に今日までのことが頭の中を横切っていく、人の話は耳に入らないが、軌条の継目の上を車輪が通過するたび毎にその衝撃音が聞こえる。そのたび毎に母から遠ざかっていき、再び幾年か後に、この音が聞かれることやら、それとも、この音が永の別れの音になるかもしれないと思うと何となく淋しい音に聞こえた。独身の私さえこんな思いがしていたのに、妻子を残して出征されて行く人達の心底は、いかばかりであったことだろうと思われます。無事帰還を神に念じながら、万感の想いを心に秘めて、送られる人、そして送る人も当時としては、人には見せてはならない涙を胸の内にためながらの別れだったことと思います。

私達の最初の目的地は中国湖北省漢口で、19年9月30日下関を出発して陸路朝鮮、華北を通過して南京へ、南京より揚子江を遡行して11月8日早朝に漢口に到着した。早朝船上より漢口市街を眺めた時、朝日が揚子江の川面に照り返して輝き、揚子江沿いの漢口の市街地にビルが建ち並んで、その美しさは、まだ見た事もないヨーロッパの街もかくあらんとの思いでした。

当時、連隊本部は湖南省長沙市にありましたが、私等は湖北省漢口の揚子兵站という所で初年兵教育を受け、一期の検閲がすみ、5月に本隊のいる長沙へ移動しました。最初の作業は線路の復旧作業で、兵隊と言っても殺し合いの戦場でなくてよかったですと思いました。鉄道隊とは字が示すように鉄道全般の業務と敵の鉄道施設の占領または破壊等ですが、私等の中隊は敗戦まで橋梁の復旧作業ばかりで、敵機による橋梁爆破のため昼夜兼行で復旧すれば、敵機が復旧の頃合を見計らってこれを爆破する。またそれを汗水たらして復旧するということの繰り返し

でした。そこで我が方も考え、列車は夜間のみ運行するので、復旧した木橋を、日の出前にレールと枕木を取り外して、まだ復旧工事中と敵機に見せかけて、夕方になるとまたこれを復旧することにした。以後は橋梁には爆弾は落ちなかった。

私等が担当していたのは粵漢（えっかん）鉄道（現在は北京－広州）の長沙付近の劉陽川と●刀（どうとう）川に架かっていた木橋で、私等初年兵の作業は川に船を浮かべて木橋の基礎杭打のためのバン索引（櫓（やぐら）のヨイトマケの網）である。常時対空監視兵が立っているが、低空で飛来した場合は爆音が聞こえにくい。監視兵が爆音と言った時には、機銃掃射を受けていた。待避する防空壕は、川土手に掘ったタコツボ式で上空からよく見える。頭の上を低空で旋回し、機体を斜めにして機銃掃射をする。頭の上を銃弾が音をたてながら飛んで行き、時には爆弾まで落として行き、その時は土がばらばらと天から降ってくる。至近弾であるから、一つ間違えば、我々が土のかわりになって、天から降ってきたかも知れない。敵機の名前はP 5 1 戦闘爆撃機、天気の良い日は定期的に飛んでくる。

私が駐留していた湖南省は中国でも南の方なので蚊が多く、私はマラリヤに罹って入院しました。幸いに快方に向かい、すぐには帰隊せず身体ならしのため、部隊の食料その他の供給所としての現地自活班という所に行かせられました。そこは長沙郊外の明慶郷という農村で、湘江という川を30分程下流に船で下ったところです。宿舎は周囲を白壁で囲った大きな一軒屋の農家で、その中に鶏豚等を飼い、また近所の女性を集めて兵隊用の紙巻タバコも作っていた。人員は軍医以下10名足らずで、私等の主な仕事は鶏のエサやりか不寝番ぐらいで、きつい仕事はしなかった。ここでは古兵も新兵もあまり区別なく、農作業、豚の世話等は近所の農民がしていた。夜間は湘江の方面から日本の発動機船が通るたび、それを狙って岸の方から機銃の音が聞こえていたが、しかしここは戦場の桃源郷だと私は感じられた。

8月、近所の顔見知りの農家に立ち寄った折、農民の態度が何となくよそよそしく感じたが、特別気にもかけずに宿舎に帰ったところ、軍医より全員集合がかかり、日本は連合軍と講和を結んだと、ただし領土は日清戦争以前の状態になると知らされた。だからその時は日本が完全に負けたとは考えなかったが、領土のことを考えれば完全な敗戦である。ああ戦争には負けたかと、悔しい思いがしたが、その反面無事に日本に帰れると安堵もあった。

軍医が講和の話をした後、部隊も武昌に向かって移動するであろうから、私と他1名はその先遣部隊として直ちに出発せよと命令が出た。私は嬉しかった。これで直ちに帰国できるのかと。でもそうではなかった。11月になっても部隊は武昌に来ないので、逆に、今月部隊が駐留している長沙と武昌の中間地、洞庭湖畔の町、岳陽へ帰隊せよとの命令を受領した。

昭和21年2月、ここ岳州より再度長沙－衡陽－冷水灘（湘桂鉄道）と、湖南省を桂林方面から南下して鉄道の撤収作業へ狩り出されました。撤収作業とは軌条、枕木、継目板を取り外して台車に積込む作業で、危険で辛い作業でしたが、でも帰国できるという希望があった。1日でも早く故国の土を踏みたいという信念をもっていたので、作業でも一生懸命働いた。5月に作業を切り上げて、6月に上海へ到着し、6月末に浦賀へ上陸。懐かしの日本の土を踏めた

ことが、頭からDDTを振り掛けられても嬉しかったです。

昭和21年7月、破れ軍服に破れ軍靴、そしてボロ毛布、飯合をブラ下げて、2年前歓呼の
声に送られた玖珠の北山田駅に降りた時の風体は乞食のなりでした。でも私の心は、それとは
裏はらに幸福と嬉しさで一杯でした。

五体満足で復員できたことは、兄が昨年戦死して、一人故郷北山田村で私の帰るのを一日千
愁の想いで待っていてくれる母への唯一のおみやげ、親孝行だと思いながらの復員でした。